

編集後記：学生時代に何となく入会した気象学会に20年以上も在籍しているが、自分にとって学会に入るメリットは何であるかを考えてみた。辞書を引くと学会とは「学者相互の連絡、研究の促進、知識・情報の交換、学術の振興などのために組織する団体」と書かれてある。確かに同じ研究分野の人との交流を通して人脈ができることは大きいし、知識や情報を交換する場でもある。研究者としては、大会や学会誌で自分の研究成果を発表し、オープンな場でその科学的妥当性を議論して業績として認めてもらうことは一番の目的であろう。気象学会では、研究を業務としない会員も多いと思われるが、仕事か趣味かは別にして気象に関心のある人の集まりであることは確かであり、プロかアマチュアかを問わなければ全ての会員が気象学者であるとも言えるのではないか。ところで、学会の役割としては、その学問分野で閉じた活動だけでなく、社会との関わりを持つことも重要である。特に気象学はそもそもが社会性の強い学問であり、社会が求める問いや要求に答えることが求められている。会員の多くも、何らかの形で社会と関わる仕事を持つ人が多いのではないだろうか。

先日、気象庁で開催された「竜巻等突風に関する国際シンポジウム」に出席した。ご存知の通り、2006年に相次いで発生した延岡竜巻や佐呂間竜巻の被害により、社会的に竜巻予測に対する要求が高まっている。

気象庁ではドップラーレーダーの整備を急ぎ、今年の3月から「竜巻注意情報」を発表することになった。竜巻や突風の予測は非常に難しいので、小さな竜巻発生の見逃しや注意情報の空振りをどこまで避けられるかが課題になるだろうが、私は社会の要求に応じてこのような注意情報を出すことを決断した関係者にエールを送りたい。昔から研究者のみならず一般市民やTV局までが竜巻の追っかけを行っている米国でも、竜巻発生には多くの謎が残されている。環境の異なる日本の竜巻を調べるためにはどうすれば良いかと米国の竜巻専門家に聞いたところ、一つでも多くの竜巻を観測して調査するのが重要ということであった。数秒でその姿を変える竜巻を直接観測できる次世代ドップラーレーダーの開発とか、子供達が安心して生きていける地球環境を守るための研究はもちろん重要である。しかし、難しいことや大きな夢ばかり考えても仕方ないので、誰でもできることとして、まずは身近な気象現象を観察・観測することから始めれば良いのではないだろうか。竜巻に限らず興味深い気象現象に出会ったら、携帯電話のカメラでも構わないので写真として記録に残す。そして、関連情報も調べて「天気」に新設された「調査ノート」へ投稿していただければ幸いです。

(佐藤晋介)